



プロフィール ふるたゆかり
フリーライター/エディター。
サイエンス・リテラシー・プロ
デューサー。科学館における科
学と社会の学びを創造するプロ
グラム開発と実践に取り組む。
中央教育審議会理科専門部会委
員、科学技術の智プロジェクト
(日本学術会議)企画推進委員。
主な著書『環境スペシャリストに
なるには』(ペリかん社)
『おはようからおやすみまでの科
学』共著(筑摩書房)など。

今、私たちにできること

— 理想的な循環型社会を目指して —



古田ゆかりさんは、縁あって板倉町には年に数回訪れます。

環境問題を考えるうえで、欠かすことのできない『もったいない』
環境問題と向かい合うフリーライターの古田ゆかりさんに現代の
問題点を伺いました。
そして今、私たちにできることは一体何か？

Step 4
もったいないから
できること

知っていますか？ 4R

理想的な循環型社会を考
えるうえで、一般的に知られて
いる3Rですが、実は、もう
一つ大切なRが存在するのを
ご存じですか？ もう一つの
Rは、リフューズ(使わない。
使うことを拒否する)です。
リフューズ、リデュース(で
きるだけ使用しない)、リ
ユース(再利用)、リサイクル
(加工して再利用)で4R。
「3Rは皆さんよく知ってい
ます。だけど、これは、本当
に必要な物かどうか良く考
え、いらぬ物だったら買う
のをやめましょう。これが4
Rの考え方です」。古田さん
は続けて、「問題となるのは、
循環していない物の流れ、持
続できていない物の流れなの

です」と言います。
地下から掘り出した資源を
最大限利用する。長く大切に
使い、そして再資源化してい
く。これが理想的な循環型社
会の姿だそうなんです。

使用する資源もごみの量も
最小限に抑え、「理想的な循
環型社会を形成するために私
たちはどうすれば良いの
か？」との問いに、「皆さんの
中の意識改革がとても大切で
す。つまりそれは、『もった
いない』と思う気持ちなのだ
はないでしょうか」と、笑顔
で話してくれました。
皆さんは、ごみを捨てる
とき、何を思いますか？「ごみ
を捨てる時、このごみはこ
の後どうなっていくのか、ど
う処理されていくのかを考
え、ごみを捨ててみてくださ

い。そうした見えないところ
を見ようとする中で、資源
の無駄。『もったいない』をな
くすることもできるのでは？」。

「安いから」の落とし穴

「人には、物欲があるのは仕
方のないこと。でも循環型社
会を考えたときにあまり都合
の良いものではありません。
まずは、安いからといって安
易に物を買わず、よく考え、本
当に欲しい物だけを買うよう
にすることが大切です」。

そして古田さんは、「もっ
と日々の暮らしに手を掛けて
みてください。自分の手足を
使って本当に必要な物を作
り、それを長く使うことを楽
しんでみてください。そこか
ら見えてくることもたくさん

ありますよ」と話してくれま
した。

『もったいない』から

先人たちは、竹やワラなど
自然の物を加工、細工して、
さまざまな道具や、生活に必
要な物を作ってきました。そ
こには「ごみとなる物などほ
んどなく、とても良く考えら
れた仕組みでした。そしてそ
れらは、最後まで大切に使用
され、土から生まれた仕組み
は、土に返されるといいます
に理想的な循環型社会そのも
のようには思えます」。

今、循環型社会を形成する
うえでとても重要となる私た
ちの意識改革。『もったいな
い』と思う気持ちから始めて
みましょう。

フリーライター
古田ゆかりさん
Furuta Yukari